

幼稚園・保育所における「気になる」子どもと その保護者への対応の実態 —クラス担任を対象とした調査をもとに— (第2報)

Surveillance Study on Children with Special Needs and Parents in Nursery Schools (II)

平野華織・水野友有・別府悦子・西垣吉之
Kaori HIRANO Yuu MIZUNO Etsuko BEPPU Yoshiyuki NISHIGAKI

抄録：

本研究では、「気になる」子どもとその保護者への対応の実態を把握するため、岐阜県下の幼稚園・保育園のクラス担任を対象とし、郵送による質問紙調査を行った。「気になる」子どもの在籍の有無とその性別、クラスでとっている対応の内容と問題、「気になる」子どもの保護者支援での問題について、回答を求めた。その結果、1267人の回答者のうち、1119人(88.3%)のクラスに「気になる」子どもが在籍していることが明らかになった。そして、保育者は「気になる」子どもだけでなく、その周囲の子どもたちと「気になる」子どもの保護者も含めて、必要な支援を行っていることがわかった。しかし、保育者と保護者との間で「気になる」子どもをめぐる認識にズレがある場合、その対応に困難を感じるということが明らかになった。このような保育ニーズの多様化・複雑化に対応するには、保育者のための電話相談機関などの新しい社会資源の創設が望まれることが示唆された。

キーワード：「気になる」子ども、発達障害、保護者支援、幼稚園、保育所

1. 研究の目的

近年、保育や教育の現場において「気になる」子どもへの対応が課題となっている。ここでいう「気になる」子どもとは、顕著な知的な遅れがなく専門機関では何らかの障害があるとは認定されていないが、「落ち着きがない」「他児とのトラブルが多い」などの行動特性をもつ、保育者にとって保育が難しいと考えられている子どもである(本郷ら, 2003)。このような子どもには特別な支援は実施されず、加配保育者など公的支援を受けないまま園や保育者が対応していることが多い。そのため周囲から「把握されにくい」「理解されにくい」と認識されているにもかかわらず、就学前後の支援は福祉の制度的谷間におかれている。

文部科学省は、2003年にLD(学習障害)、ADHD(注意欠陥/多動性障害)、高機能自閉症などで特別な支援が必要な児童生徒が6.3%存在するという調査結果を発表した。しかし、軽度の発達障害や「気になる」子どもとして注目される子を含めると、実際にはそれ以上の割合で配慮の必要な子どもが保育や教育現場に存在すると思われる(文部科学省, 2004)。

池田ら(2007)の保育所における「気になる」子どもの調査によると、話をきけない子ども、多動な子ども、きれいやすい子どもが保育所において以前と比べて“増えた”と回答した保育者は過半数を超えており、継続して

保育者を支援できるシステム作りが早急な課題であると指摘している。

このような実態の中、多くの保育現場では「気になる」子どもの対応は、保育現場だけで行うものではなく、家庭、保護者とともに行うことが大切であると捉え、家庭と有機的な連携をもつ必要性を感じている。しかし、「気になる」子どもと同時に保護者への対応に困難を抱えている保育者は多い。斉藤ら(2008)は「気になる」子どもとその保護者支援について調査しているが、保育者が「気になる」子どもの保護者とのかわりで困難に感じたことへの回答では「『気になる』ことの伝え方」が最も多い回答だった。これは、伝え方によって、保護者との関係が壊れてしまうことへの保育者の懸念だと考えられる。また、本郷ら(2004)の研究において、保護者が自分の子どもの状態を認めている場合、積極的な支援が行われているが、保護者が子どもの状態を認めることに拒否的である場合は支援が困難であり、事態を見守らざるを得ない傾向にあることがわかっている。

こうした状況から、保育ニーズの多様化・複雑化は、幼稚園・保育所における保育者の多忙化とバーンアウトの問題とも繋がっている(宮下, 2010)といえる。また、水野ら(2007)による新任保育者の職場適応の調査によると、就職後に仕事を辞めたいと思ったことのある保育者が約6割にのぼることが明らかになっている。

そこで本研究では、「気になる」子どもの実態、およ

び「気になる」子どもの保育における保育者の困難さ、また「気になる」子どもの保育をめぐる問題や課題を明らかにすることを目的とし、岐阜県下におけるすべての幼稚園・保育所を対象に質問紙調査を行った。別府ら(2010)の第1報に引き続き第2報として、クラス担任を対象とした調査結果を報告し、こうした結果をもとに、「気になる」子どもの保育における課題、および保育の多様化・複雑化に 대응する人材育成のあり方について考察した。

2. 方法

- (1)調査対象：岐阜県下の全ての幼稚園、保育所（633ヶ所）において、各クラス（年少・年中・年長）を担当している保育者を対象とした。
- (2)調査期間：2010年1～2月
- (3)調査方法：岐阜県下全ての幼稚園と保育所を対象に、郵送で質問紙による調査を実施した。調査用紙には園長および主任を対象にしたものと、クラス担任用がある。本報告は、クラス担任を対象とした調査用紙を基に検討した。

表1 調査項目

I. 園種別や規模について
①園種
②在籍園児数
③全クラス数
④全職員数
II. 担当クラスについて
①担当児の年齢
②児童数
③全クラス数
④全職員数
III. 担当クラスについて
①担当児の年齢
②児童数
③保育者数
④障がい児・発達支援児の認定数
IV. 回答者について
①保育経験年数
②性別
V. 気になる子の姿について
①基本的属性
②生活面・行動面・感情面
・保育者との関係で見られる行動
・他児との関係でみられる様子
・集団場面でみられる様子
③親子関係・家庭環境など
④先生の困り度
VI. クラスでとっている対応
VII. 「気になる」子どもの保育で困っていること
VIII. 「気になる」子どもの保護者支援で困っていること
IX. 日頃気になる保護者の姿
X. 業務多忙の理由
XI. 保育全般について日頃感じること

(4)調査内容：調査項目は表1のとおりである。

「気になる」子どもの行動特徴に関する項目は、先行研究である本郷ら(2004)の調査で用いられたものを基に、保育現場での経験が深い研究者の意見を加え、作成した。このうち、本稿では「I. 園種別や規模について(①)」、「III. 回答者について(①、②)」及び「IV. 気になる子の姿について(①)」「V. クラスでとっている対応」「VI. 気になる子の保育で困っていること」「VII. 気になる子の保護者支援で困っていること」について検討した。

- (5)倫理的配慮：本調査の実施にあたっての倫理的配慮として、本調査は原則無記名とし、調査対象者の個人情報保護、そして研究結果の目的外使用の禁止を誓約する旨を調査票に記載した。
- (6)留意点：「気になる」子どものうち、障がい児、発達支援対象児として認定されている子どもは除くことを明記した。

3. 結果

(1)回収状況

回収状況は表2の通りである。

岐阜県下全ての幼稚園・保育所638ヶ所を調査対象としたところ、368ヶ所(回収率58.1%)から回答があり、1267名の幼稚園教諭及び保育士から回答があった。

表2 園種別ごとの回収率・回収人数

園の種類	回収園数	回収率(%)	回収人数
公立幼稚園	42	51.2	92
私立幼稚園	52	49.1	345
公立保育所	163	60.4	504
複合施設	14		50
民間保育所	97	63.9	238
不明			38
計	368	58.1	1267

なお、調査用紙はなるべく多くの保育者に配布するよう依頼をしたため、調査用紙配布数は正確に把握できていない。したがって保育者についての回収率は求めている。

以下、回答のあった1267名についてその属性等を述べる。

(2)回答者の属性と保育経験年数

回答者1267名のうち性別は、男性33名(2.6%)、女性1208名(95.3%)、不明26名(2.1%)だった。

また、保育経験年数では、5年未満が379名(30.0%)、5年以上10年未満が319名(25.2%)、10年以上20年未

満が309名(24.4%)、20年以上が215名(20.0%)、不明が45名(3.6%)だった。

(3) 「気になる」子どもの在籍状況

「気になる」子どもが回答者の担任しているクラスに在籍しているかどうかについて回答を求めた。「気になる」子が「いる」と回答したのは1267人中1119人(88.3%)であり、「いない」と回答したのは148人(12.7%)だった(図1)。クラスを担当している保育者のほとんどが「気になる」子どもの対応に関わっていることが明らかになった。

(4) 「気になる」子どもの男女比

「気になる」子どもが「いる」と回答した保育者に、その人数と男女比の回答を求めた。「気になる」子どもの総人数は3007人で、そのうち「男児」が2213人(73.6%)、「女児」が794人(26.4%)だった。「気になる」子どもには男児が多いことが明らかになった。

(5) 「気になる」子に対する個別担当保育者の配置状況

個別の担当保育者を配置している「気になる」子どもの数についての回答を求めた(図1)。その結果、「配置している」子どもは123人(4%)、「配置していない」子どもは2884人(96%)であった。「気になる」子に対して個別の担当保育者を配置しているケースは少なく、多くの場合園やクラス担当者がどこからも援助を受けずに対応せざるをえない状況にあることが確認された。

(6) 「気になる」子どもに対する個別計画立案の実施状況(図1)

個別計画が立案されている「気になる」子どもの有無について回答を求めた。立案されている子どもは192人(6.4%)、計画が立案されていない子どもは2815人(93.6%)だった。ほとんどの「気になる」子どもについて、個別計画が立案されていないことが明らかになった。

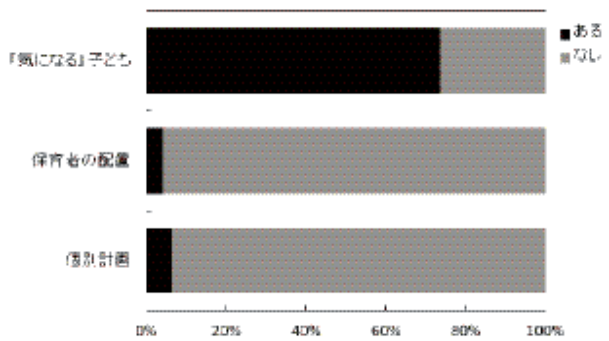


図1 「気になる」子ども・保育者の配置・個別計画の有無

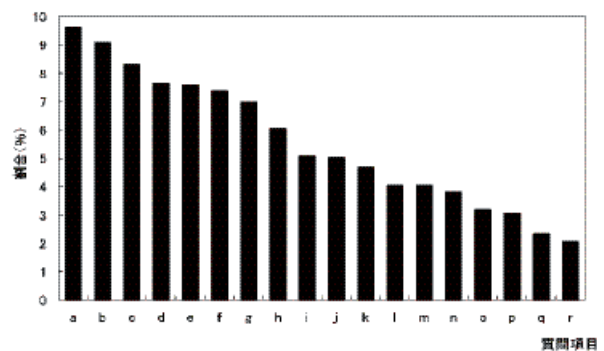
(7) 「気になる」子どもとその周囲の子どもへの対応や工夫

「気になる」子どもと「気になる」子どもを取り巻く周囲の他児に対する保育について、保育者がクラスでどのような対応をとっているかを把握するため、その具体的な保育内容や方法について、複数回答で尋ねた(図2)。この結果、「『気になる』子どもには、子どもと他児間で起こるトラブルの際は、その原因を尋ねるようにしている」827人(9.6%)、「子どもたちが自分の気持ちを言葉で表現する保育を進めている」779人(9.1%)、「『気になる』子どもの気持ちを他児に伝えている」712人(8.1%)の順で回答が多かった。

本郷ら(2003)はトラブルの原因は「気になる」子ども本人だけではなく、他児にもあると指摘している。保育者は「気になる」子ども本人の気持ちだけを優先せず、他児との関係にも目配りしなければならないと考えられる。

また表3は、「気になる」子どもや他児への対応として実際に行っている保育内容や方法で、質問項目にないものの自由記述について、内容別に分類した結果である。「気になる」子どもへの対応として、「わかりやすい言葉で伝える」「視覚に訴える」「目をあわせる」という、コミュニケーション上の工夫がなされており、また、「抱きしめてあげ、安心感を与える」という保育者との信頼関係づくりも重視されていることがわかった。

さらに、「頑張りを認める」など「気になる」子どもの自己肯定感を高める配慮も行われていた。そして、クラスづくりや他児との関係づくりにおける工夫では、「気になる」子ども＝「あの子は悪い子」と他児がレッテルを貼らないよう、必要な時には周囲が助け合えるク



- a. 「気になる」子どもには、子どもと他児間で起こるトラブルの際は、その原因を尋ねるようにしている。
- b. 子どもたちが自分の気持ちを言葉で表現する保育を進めている。
- c. 「気になる」子どもの気持ちを他児に伝えている。
- d. 子どもたちが表現する言葉や行為を共感的に受け止めている。
- e. 子ども同士の共感と認め合いを大切にしながら保育を進めている。
- f. 「気になる」子どもには、個別対応の種類を講じている。
- g. 「気になる」子どもの親と時間をとって話すようにしている。
- h. 「気になる」子どもがトラブルを起こす子どもに配慮している。
- i. 「気になる」子ども自身の気持ちに気づかせ、情緒に積極的に取り組ませている。
- j. 子ども自身が一歩ひとりの進歩を認め入れるように設定している。
- k. 「気になる」子どもが好きな遊びを十分にできるように設定している。
- l. 「気になる」子どもの保護者に対してクラスでの活動を積極的に伝えている。
- m. 「気になる」子どもの進捗状況によりやりとりしている。
- n. 「気になる」子どもの過激な行動に対して、他児が適度に反応しないようにしている。
- o. 新聞記事をもつてクラス進捗を行うようにしている。
- p. 自分自身と少人数で遊ぶ機会を確保している。
- q. 「気になる」子どもが持つ保育者への不満を解消している。
- r. 前日の遊びとの連続性を考え、遊びを構成している。

図2 「気になる」子どもとその周囲の子どもへの対応

ラスづくりが心がけられていることがわかった。

一方、保育者は、子ども集団だけではなく、保護者への支援も視野に入れていることや、担任ひとりではなく、園全体で「気になる」子どもの支援に取り組む姿勢を重視する回答もあった。

(8) 「気になる」子どもを保育する上での困難感

(7)の結果から、保育者は「気になる」子どもやその周囲の子どもに対して、対応を工夫しながら保育を行っていることが明らかになった。このような「気になる」子どもを配慮した保育の中で、保育者たちは多くの困難感を抱えている。図3は、「気になる」子どもを保育する上での困難感に関する回答の結果である。「丁寧にかかわってあげられない」という回答が最も多く421人(33.2%)であり、その背景に近年の保育者の多忙化が

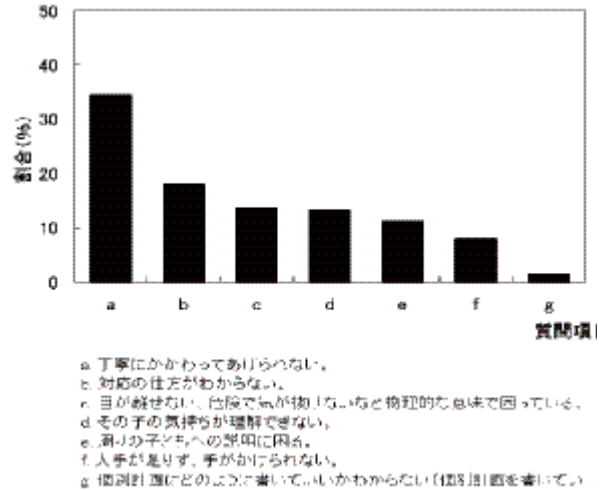


図3 「気になる」子どもの保育において困ったこと

表3 「気になる」子どもやその周囲の子どもへの対応に関する自由記述(主なもの)

「気になる」子どもへの対応
<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい言葉で、伝えるようにしている。わかるまで何度もくり返し行っている。 ・視線が全く合わないで、話をする時に必ず目を合わせてから話しをしている。 ・視覚に訴える、短いことばで指示、順番に1つずつ、あらかじめ予定を話す。 ・言葉だけでは理解が難しい子は絵で説明したり、実際に物と言葉をつなげながら、イメージしやすいよう努めている。 ・情緒的に不安定な部分があるので、抱きしめたり話を十分に聞くようにしている。 ・子どもが抱きしめて欲しいという行動があれば、気持ちを受け止め、抱きしめてあげ、安心感を与えるようにしている。 ・褒めることを大切にする。気になる子の気持ちを受け止め、やる気が出るような言葉がけをしている。 ・「気になる」子どもの苦手とする活動ができた時にはシールを貼るなどの表を作り、頑張りを認めてあげられる機会を作っている。
クラスづくりの工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・「気になる」子が他児との関わりの中で、認められたり、支えられたりしながら自信をつけているようにしている。クラス皆で困った子がいたら助けてあげる思いやりの心を大切にしている。 ・「気になる」子どもの長所を認めみんなに伝え、クラスみんなで、助け合っている。 ・どの子も一人ひとりがかけがえない大切な子として受けとめ“友だち”のすばらしさに気づくよう、一人ひとりの良さを認め、ほめ言葉をかける。その事でクラス皆が成長していけるように思う。 ・どの子も、クラス全員が「気になる」=「大切な子」として接している。1人1人には種類こそ違えど、どんな子にも得意なこと、そうでないことがある。それぞれの特徴が理解し合えるクラスづくりをめざして、道徳教育、人権教育といった根本的な考え方が育つ対応を日々、とっている。
「気になる」子どもと他の子どもとの関係づくり
<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの一員として大切な存在ということを周りの子ども思えるようにしている。 ・クラスの子に対しては、気になる子の思いや良さを伝えて、仲間として受け入れるよう働きかける。 ・指導する事が多い事から、周りの子が、この子はこういう子…というレッテルを貼ってしまわないように意識した対応を心がけているが難しい。 ・「気になる子」に対して注意することが多いが、それを見て周りの子が「またおこられる」「あの子は悪い子」と思わないよう、本人のいいところも、周りの子が認められるように話す。 ・その子の気持ちを他の子へ伝えてあげる。・子ども同志の関係が壊れないように、遊び方や生活に注意する。“気になる子”の行動には理由があることや、自分たちはその行動に過剰に反応せずにとっとしてあげ ることを他児に伝える。
親への支援
<ul style="list-style-type: none"> ・親さんとのコミュニケーションを大切にしています。子どもの良い所をたくさん伝え、子育てに不安 をもっている親さんが安心できるよう、心掛けています。 ・また親さんが子育てに自信がなく不安そうにしているので、自信をもってもらえるようはげましている。 ・外国籍の子どもへの印刷物は内容を母親に直接話して伝えるようにしている。
職場内の連携
<ul style="list-style-type: none"> ・担任1人だけではなく、園の職員(園長・加配教諭など)で話し合い、その子にあった手だてはどのようにすると良いのかなど、園全体で取り組んでいる。 ・クラス担任同士でその子に対してどう対応していくか話し合い共通理解している。 ・一人で考え込まず、周りの先生方と話し、その子にとって良い対応ができるよう心がけています。

表4 「気になる」子どもを保育する上で困っていることに関する自由記述(主なもの)

<p>親との共通理解が困難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者への伝え方、理解してもらうには、どのようにしていけばよいのか。 ・就学へ向けてどう対応して良いか、又、保護者にどこまで伝えていって良いか、悩んでいる。 ・「気になる」子は毎年増えているが、親にそれをどう伝えれば良いか？ちゃんと受け入れるのか？ ・保護者の理解への不安。持ち物（タオル等）が洗濯されていない時がある。お風呂に入っていないなどだらしのない面が見られるので…そのことを保護者に伝えるのが難しい。 ・保護者の方に、「気になる」ことを伝えてもあまり真剣にとらえていただけない。 ・外国籍の子どもへの印刷物は内容を母親に直接話して伝えるようにしている。 ・日本語の理解が親子共に不足している所がある為、特別な行事や連絡事項を伝える際困る。また、社会生活の中で必要な微妙な感覚が伝えられない。子どもに「良い」か「悪い」という両極端な判断しか伝えられず、不安にさせてしまうことが多く、繊細な保育・援助が伝わらない。・親子共中々言葉が通じない。しかしA児は母国語もほとんど話せない。
<p>集団活動に影響がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの子が全く見れない。・担任1人のため、一斉で活動している時など、十分に援助をすることが難しい。 ・担任1人で保育を進める場合、本児の思いに答えられない事が多く、トラブルになり、集団活動を中断しなければならない事が多い。大声で叫んだり、暴れるなど、保育者の声が通らない、他児が集中できない状態が続いている。 ・集団での活動を乱す ・担任はクラス全体を見て指導するので、必要な時は補助の先生がいるといいなと思う。
<p>「気になる」子どもの対応が困難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年齢が低い為障害と特定できず対応が難しい。 ・対応がわからない。どのような言葉掛けをすればいいかわからない ・発音が不十分なので、何を言っているのか分からない時もある。 ・声掛けても、反応がなかったり、必要以上に声を掛けてしまっているのではないかと感じてしまう。
<p>保育者に余裕がない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広い心をもって接してあげることができない。 ・じっくり関わってあげなければいけないと思っているが、全体をすすめる必要があると思うとじっくり話をきいてあげられない。 ・時間に余裕がある時はゆっくり対応できるが、時間に追われると十分な配慮ができない。 ・正直、保育の内容が忙しすぎて、じっくりと個々と関わる時間が少ないと感じている。
<p>「気になる」子どもと他児の関係を仲介することが困難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任一人では他の子の行動も見られず、騒がしい雰囲気になってしまう事が多い。 ・自分の気持ちがおさえきれず、すぐに手を出したり、暴言をはくことがあり、友だち同士のトラブルが多々ある。 ・「気になる子」＝「悪い子」と周りの子どもたちがかん違いしないよう、気をつけながら声かけをしている。その子が注意されることが多いため、周りの子どもたちもその子が「悪い子」というイメージを持ってしまう。 ・何もしていない子にパンチをしたりする。

あるのではないかと推測される。「対応の仕方がわからない」219人（17.2%）、「目が離せない、危険で気が抜けないなど物理的な意味で困っている」167人（13.1%）、「その子の気持ちが理解できない」162人（12.7%）という回答があり、「気になる」子どもの示す姿に保育者としてどのように向かい合えばよいのか、悩みをかかえている保育者が少なくないことがわかった。

さらに、「気になる」子どもを保育する上で困っていることについて自由記述を求めた。表4は、その内容をKJ法で分類し、まとめたものである。「親との共通理解が困難」「集団活動に影響がある」という回答が多かった。特に外国籍の親子に対しては、言語の壁が厚く、保育者がその対応に苦慮していることがわかる。また、「気になる」子どもの対応に対して「どのような言葉かけをすればよいかわからない」「対応が難しい」という回答も多く、特別な配慮や支援が必要な子どもの保育や、障害児保育の経験がない保育者は、専門家からの助言や専門知識の獲得を望んでいるのではないかと考える。

(9) 「気になる」子どもの保護者支援における問題

「気になる」子どもの保育では、保育者と保護者との信頼関係づくりや共通理解が必要不可欠で、且つ、そこに難しさがある。上記の自由記述の結果において、実際に、「気になる」子どもの保護者との共通理解に難しさを感じている保育者は少なくないことがわかった。その原因を具体的に把握するため、「気になる」子どもの保護者支援で困っていることを尋ね、その結果を示したものが図4である。これによれば、「『気になる』子どもの保護者が我が子の園（所）での状況を理解しようとしていない」が最も多く、226人（22.9%）だった。次いで、「『気になる』子どもの保護者が専門機関にかかろうとする意志がない」が219人（22.2%）だった。

大神（2011）の調査においても、保育者と保護者のずれは、総合して保育者が「心配」、保護者は「心配なし」とするケースがほとんどであり、保護者の方が楽観的であることが確認されている。同じ集団であっても、幼稚園や保育所と、家庭という異なる活動の場において、

子どもたちの見せる姿に違いがある。このことが、保育者と保護者の捉え方の差につながると考えられる。しかし、必ずしも両者の認識の差を埋める必要はなく、双方の視点を含めた全体的な子どもの姿を捉えることが重要だといえる。さらに、「気になる」子どもの保護者支援に関して具体的な自由記述を求めたところ、様々な問題が挙げられた(表5)。「気になる」子どもの保護者自身に、何らかの課題があるケースも少なからず存在した。そもそも保護者自身が病気や経済的な問題、言語、発達上の課題を抱えている場合、保育者の対応はさらに複雑、多様化せざるをえない。こうしたことが、保育者と保護者との連携の難しさにつながることがわかった。

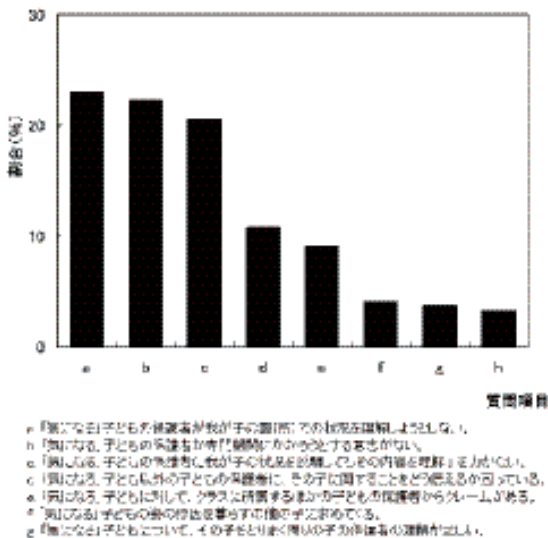


図4 「気になる」子どもの保護者支援において困ったこと

4. 考察

(1) 幼稚園・保育所(園)における「気になる」子どもへの対応の実態

本調査では、岐阜県下における幼稚園・保育所(園)における「気になる」子ども・保護者への対応の実態を明らかにし、それに対し保育現場でどのような課題があるのか、どのような支援が求められているのかを検討することを目的とした。検討資料は、クラス担当教員を対象とした質問項目と自由記述式回答の質問紙調査から得た。1267人の回答者のうち、自分のクラスに「気になる」子が「いる」と回答したのは1119人(88.3%)であり、約9割のクラス担当者が「気になる」子どもの保育に関わっていることが明らかになった。回答者のクラスに在籍する「気になる」子どもの総数は3007人である。しかし、そのうち個別計画がたてられている子は192人(6.4%)、個別の担当保育者を配置している子は123人(4%)とわずかであることが分かり、ほとんどの場合クラス担当の保育者がひとりで「気になる」子どもの保育に対応している現状が明らかとなった。

2006年国連総会において障害者権利条約が採択され、日本もその批准に向けて、国内の障害児者に関わる制度が大きく変わろうとしている。特に、障害児分野では「インテグレーションからメインストリーミング、そしてインクルージョンへ」という流れの中で、現在の保育園・幼稚園には「気になる」子どもをはじめ、軽度発達障害児や身体・知的障害児など、さまざまな子どもが通園している。統合保育は、障害のある子ども、ない子ども双方にとってよい影響があるとの先行研究は多くある(位頭, 1991)。しかし、インクルーシブな保育・教育を実体化させるには、障害のある子どもはもちろん、障害があると判定されないが配慮の必要な「気になる」子どもに対して、加配保育者や補助教員、個別計画の作成などの合理的配慮や支援を行うことは必要だと考える。今回の調査において、保育者の多忙化も進み、「気になる」子どもに丁寧に関われないジレンマも明らかになったが、保育者だけに責任を負わせるのではなく、加配の充実なども含めた様々な社会資源を増加させるよう、保育制度の拡充が求められている。

(2) 「気になる」子どもの周囲の子どもへの配慮

「気になる」子どもとその周囲の子どもに対し、クラスでどのような対応をとっているか尋ねた結果、子どもたちがお互いを助け合い認め合えるようなクラス運営を保育者は心がけていることがわかった。池田ら(2007)の調査において、保育者は集団活動の中での逸脱した子どもの行動に保育の困難性を感じると指摘されている。本調査結果では集団活動の中でも「子ども同士のトラブルでは原因を尋ねるようにする」「自分の言葉で表現できるよう促す」「『気になる』子どもの思いを他児に伝える」などの工夫がなされており、多忙な中でもきちんと時間を割いて子どもたちと関わろうとする保育者の姿勢が伺えた。自由記述の中には、「どの子も、クラス全員が「気になる」=「大切な子」として接している。1人1人には種類こそ違えど、どんな子にも得意なことと、そうでないことがある。それぞれの特徴が理解し合えるクラスづくりをめざして、道徳教育、人権教育といった根本的な考え方が育つ対応を日々、とっている」との回答があった。「気になる」子どもの支援を通して、クラスの子どもの全員の育ちと学びがより充実したものとなるよう、日々保育者が奮闘している実態が明らかとなった。

(3) 「気になる」子どもの保護者支援の課題

「気になる」子どもの保護者支援に関して、保育者が最も困難を感じることの質問に対し、「『気になる』子どもの保護者が我が子の園(所)での状況を理解しようとしていない」226人(22.9%)、次いで「『気になる』子どもの保護者が専門機関にかかろうとする意志がない」219人(22.2%)、「「気になる」子どもの保護者に我が子の状況を説明してもその内容を理解する力がない」202人

表5 「気になる」子どもの家庭支援において困っていることに関する自由記述(主なもの)

<p>親が受け入れない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親が“気になる子”の行動や姿を受け入れられないこと。 ・認めたくない、という親の気持ちも理解できるが、そう言う話しになると、あまりいい顔をされない。 ・受け入れることができない親さんには、どれだけ伝えても、空返事されてしまうこともあり、みとめたくないのと思うが、それでは話しが進んでいかず困る。
<p>親自身の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父子家庭で祖母の協力は得られるが父親自身の親としての自覚や子ども理解に欠ける。 ・母親がうつ病の様な感じで、何度も同じ様なことで文句を言ったりしてきて、対応に困っている。子どもも保育者も母親の気分に振りまわされている。 ・本当は3才児検診でひっきり、療育に行かなければいけないのに、途中でやめてしまった。もう1人の子どもはそもそも3才児検診を受けていないことがわかった。 ・お母さん自身も話が理解できない事がある。(自分で、考えることが苦手) ・お父さんと話をしたときに、全然目があわなかった。下をむいてずっと話をしている、子どもにもそれがうつっているような気がした。
<p>親が気にしていない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園での姿と家庭での姿が違うので、園での姿で困っていることを話しても、いまいち気にしていない。 ・こちらとしては専門機関を進めたいのだが、保護者の方はあまり重大な問題として捉えていない。 ・保護者の方に「気になる」姿について話しても、「うちの子はのんびりしているから」「12月生まれだから」などと理由をつけて、あまり気にしていないこと
<p>親と協力関係が築けない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親との連絡をとっても、親からの発信がない。一方通行に近い。 ・自分の子どもが言っていることだけを信用し、保育者に相談なしに直接相手の保護者に文句を言うことがあり、トラブルになって困る。 ・言葉が伝わらない。手紙などローマ字などでのふり仮名うちには大きな負担を感じる。 ・母親と父親、祖父母の捉え方、考え方が違うため理解されない。
<p>親への伝え方に悩む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの姿の伝え方は難しく悩まされる。 ・保護者に本当の事を伝えにくい。 ・親と幼稚園側でその子をみている視点がちがう為、こちらの思いを伝えていくのは難しい。 ・どう伝えたら理解してもらえるのか、不自信を持たれない為にはどう伝えたら良いか。 ・保護者自身が「この子はできる子！」と思ってみえる為、気になることが言いにくいこともある。 ・母親と連絡が取れず、子どもの園での様子など直接伝えることができない。

(20.5%)との回答が続き、保育者が「気になる」のだが、保護者は気にしていない状況が多くあることが明らかになった。郷間(2007)の先行研究においても、軽度発達障害の子どもに対し、保護者がその問題に気づかないことも少なくなく、また、子どもの問題に気づいても障害を受容するまで長い時間がかかることが報告されている。発達障害は「見えない障害」だと言われる。軽度の発達障害と判定さえつかない「気になる」子どもの場合、保護者がふと気づいたとしても否定する気持ちの間で揺れ動くこともあるだろう。子どもの支援に加え、「気になる」子どもに気づかない保護者、気づいても受け入れない保護者、さまざまな保護者の支援も視野に入れなければならない保育者の困難も、重要な課題であることがわかった。

また、自由記述の中から、外国籍のため言語によるコミュニケーションが十分とれないケース、保護者自身が精神的な病気や発達上何らかの課題を抱えていると推測されるケースなど、家庭環境が「気になる」子どもに何らかの影響を与えていると推測できるものも浮かび上った。

た。保護者と子ども、双方に配慮が必要なのに、適切な制度的支援がなされていないとなると、親子で生活上の二重のハンディを負うことになる。子どもに加え、その保護者にも気がかりなことがある場合、保育者だけでなく、他の社会資源も活用した組織的な支援が必要になると思われる。

(4)保育者の専門性の向上、力量形成に向けた課題

「気になる」子どもの対応として、園内での連携に関わる回答も多くあった。クラス担任だけで抱え込まず、他の保育士と問題を共有し、話し合う時間と場を求める声も多く回答されていた。そのためには、園全体で「気になる」子どもの保育に取り組むという雰囲気づくりも必要である。保育者が他の保育者と本音で語り合える場をつくることは、保育者の力量形成にも大きな意義を持つと考えられる。

また、「気になる」子どもの対応がわからないとの回答も多くあげられたが、わざわざ専門機関に出向かなくても、専門家に気軽に助言が受けられるような保育者の

ための電話相談機関の創設などの新しいシステムが望まれる。そして、「気になる」子どもだけではなく、その保護者の支援も含めて専門家が関わられるような制度が必要であると考えられる。

今後、保育現場におけるニーズに応えるには、本研究の継続とさらに「気になる」子どもの保護者が抱える問題について、早急にかつ深く検討する必要があると思われる。また、幼稚園と保育所、男児と女児といった双方向的な分析にも着手する必要がある。

〈付記〉

岐阜県下において、質問紙調査に協力して下さった幼稚園・保育園の先生方に深く感謝いたします。

〈引用文献〉

- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究.発達障害研究25(1).50-61
- 文部科学省 (2004) 「小・中学校におけるLD (学習障害)、ADHD (注意欠陥/多動性障害)、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案)」
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川端季・永井利三郎・中尾禮子 (2007) 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究.小児保健研究66(6).815-820
- 齊藤愛子・中津郁子・栗飯原良造 (2008) 保育所にお

- ける「気になる」子どもの保護者支援—保育者への質問紙調査より—.小児保健研究67(6).861-866
- 本郷一夫・高橋千枝・平川昌宏・角張慶子・飯島典子・杉村僚子 (2004) 「気になる」子どもの保護者支援に関する調査研究.教育ネットワーク研究室年報4.1-15
- 宮下敏江 (2010) 保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討.上越教育大学研究紀要29.177-186
- 水野智美・徳田克己 (2007) 就職後3ヶ月の時点における新任保育者の職場適応 I : 悩みと離職願望.日本教育心理学会総会発表論文集49.253
- 大神優子 (2011) 「気になる子」に対する保育者と保護者の評価—SDQ(Strengths and Difficulties Questionnaire)を利用して.和洋女子大学紀要51.179-188
- 位頭義仁 (1991) 軽度発達障害児の統合教育に関する研究.鳴門教育大学研究紀要<教育科学編>6.1-22
- 郷間英世 (2007) 軽度発達障害によく見られる症状、どのような症状があるときに軽度発達障害を疑うのですか? また症状が明らかでも家族に病識がない場合どのような対応が適切ですか?.小児内科第39巻第2号別冊.165-167
- 別府悦子・西垣吉之・水野友有・林陽子・眞野美佐子・喜多一憲・山田陽子・浅野俊和・山田丈美・平井博史・柴崎直人・加納誠司・平野華織・宮本正一 (2011) 幼稚園・保育所(園)における「気になる」子ども・保護者への対応の実態と保育者養成—園長・主任調査をもとに— (第1報).中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第12号.119-128